

| | |
|-------------|---|
| Title | 第6号の刊行にあたって |
| Author(s) | 田中, 耕治 |
| Citation | 教育方法の探究 (2003), 6: i-ii |
| Issue Date | 2003-03-31 |
| URL | https://doi.org/10.14989/190284 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

第6号の刊行にあたって

田中 耕治

『教育方法の探究』第6号が完成した。投稿された論文を眺めると、あらためて教育方法という学問の持つ懐の深さや広さを感じる。しかも、実証研究は当然としても、歴史研究や比較研究をとっていても、そこには共通して「現場」感覚といってもよい心性が働いているところに、まさに教育方法の特色が顕著である。

もちろん、そうは言っても教育方法の学とはなんぞやという問いに明確な回答がなされているのではない。筆者が学生の頃に先輩たちが講座の性格をめぐる激しく議論されていたことを思い出す。また、筆者が理事をしている「日本教育方法学会」と「日本カリキュラム学会」では、それぞれが他方を意識して「教育方法とカリキュラムの関係」が常に議論的になり、大会での課題研究やシンポジウムの持ち方に影響を与えることになる。

しかし、学問の性格や体系が明確でないことをことさらに嘆く必要はない。むしろ、性格や体系を意識しすぎて、小さくまとまろうとすることこそ警戒しなくてはならないだろう。性格や体系の未熟さは若い科学の必然とて、その学問の可能性を示す指標と受け止めておきたい。もちろん、このような気概が空回りしないためには、常に自らの研究に対する方法論的な反省を加えることを怠ってはならないだろう。

本号に寄せられた力作を個人の業績にとどめることなく、研究室の共同の成果として、教育方法の学的あり方を問う糧になることを期待したいと思う。